「子どもの本の世界大会」の記録を読む

中村　悦子

この原稿がでるころには、青山の子供の城を会場に開催された第20回IBBY東京大会は、丁度1年前になります。この大会は、「なぜ書くか、なぜ読むか」を主題に掲げる、アジア地区では初めての子どもの本に関する大規模な世界大会で、その後の報告によれば、参加者は、50か国2地域（台湾、香港）から826人、（国内498人、国外328人）の登録があったといいます。

直前にモーリス・センダック氏の不参加が伝えられましたが、今やブームと言えるような人気のあるM・エンデ氏、根強い読者をもつフィリッパ・ピアス氏を初めとする8つの講演、「子どもの本の未来」「子どもの本の創造」「私たちにとって子どもは」という刺激的な3つの分科会があり、そのうえに、今年のアンデルセン賞の受賞者の講演もきけるというのですから、期待されました。

そして、この催しを中心に、周辺プログラムとして、東京庭園美術館の「日本の子どもの本の歴史展」をはじめ、会場の小部屋で催された「文庫の部屋」まで様々あり、それらが連日新聞でも報道されて、その夏は、一挙に子どもの本の関心が高まったように思われました。

それから半年たち、先日和英両文記載の分厚い論集が届きました。あの熱気が、何をもたらしたのだろうかとページをくりながら、私も会に参加して考えたことを思い出しました。そこで、今回は、その資料をもとに、大会からえた幾つかの問題を記してみたいと思います。

資料は、一九八六年子どもの世界大会—第20回IBBY東京大会—なぜ書くか・なぜ読むか　一九八六年八月一八日（月）—二三日（土）　社団法人　日本国際図書評議会です。

国際大会・国際会議ということ

国際社会の現今では、国際会議の類は物珍しいものではないでしょう。しかし、具体的な体験となるとそう多くの日本人が経験しているわけではありません。日本の地理的、言語的、そして経済的条件が、日本人の国際社会への参加を少なくしていました。しかし、現今の日本の情況は、出かけていって吸収する一方でなく、迎えて示すことも要請されているようです。

ところで、文化や社会の違う多くの国ぐにの人々と話しあうこの種の国際会議に期待されることは、何でしょうか。他の国の実情を知ることだけならば、現代の高度な情報社会では、私たちは居ながらにして資料を得ることが出来るでしょう。大会実行委員長の渡辺

茂男さんは、開会挨拶のなかで次のような忘れられないエピソードを語っています。

一九七四年のブラジルでの「本は人生の教師」をテーマとする大会で、日本の子どもをめぐる読書状況を報告しました。「ところが、私の報告は、思いもよらず、『現実を無視した物』としてラテン・アメリカ諸国の人達の激しい批判の対象となりました。私は、大人の識字率が非常に低い国々の人々に対して『親が子どもに本を読みきかせる習慣』をすすめ、一般の人達がこどもの本を買うことが出来ない国で『家庭文庫』の育成を提案していたのです。会議の合間に現地の実情にふれた私は、現実を理解していなかった自分に気づきました。この恥かしさは、一生忘れることは出来ません。しかし、そのカルチャーショックは、私の世界を見る目を開き、異文化に接するこころがまえを育ててくれました」と。

このことについては、渡辺氏は、かつても記している（「子どものほんの世界」『文学』岩波、1976）ところから、彼の国際的活動の原点となっているものと考えられます。彼の恥かしさ、そしてその後の活動を駆立てたものは、相手国の様子を知らなかったという知的レヴェルでのことではなく、自分の理論なり、体験の尺度でものを言い、それを良いものとして相手に押付けることは、文化の問題において恥ずべきことだとの認識です。意見を主張することと、理解し分かちあうこととは違うということが良く分るのが、ある意味で国際活動の第一歩なのかも知れません。

この様な目で分科会の発表を読んで見ると、それぞれの方の論点も論じかたも様々ですので、意見をかみ合わせ、参加者の意見も

いれて話し合う事の難しさを見、司会者の苦汁のまとめも読み取る事が出来ます。司会者の一人の松岡さんは、これらの経験から、話合いには、一、時間が必要な事、二、発表の技術　三、聞き方などに就いて考える必要をのべていますが（「こどものとしょかん」No.三一）、うなずけることです。

講演するということ

ここには、八人の基調講演が、おさめられています。この講演当日に、私たちは、早くもその資料を入手出来るので、その内容は読んでも知ることが出来ます。

しかし、私が改めて発見したことは、読むことと聞くこととの間の違いを感じとったことでした。その演者が、ステージに現れて話すとき、私たちは、その言葉に託された内容とともに、まさにその人となりと対面します。活字になったものからそれを捉えるのは至難です。しかし、目で見直すことによって、今度は話し手の話の組立てをあとずけることができます。その人が自分のテーマにどう取り組んで、言葉に構築しているかを見ることが出来ます。この点で、両極を示しているのがM・エンデ氏と安野光雅氏でしょう。前者が、強固な構築の例とすれば、後者は、極めて即興的な例といえましょう。

エンデ氏はなぜ書くかの問いに応えて、冒頭「むかで」の話を導入に使いました。その語り口に引かれて、聞き手が笑っているうちに、それが見事な比喩であることに気づくのです。

物語作家らしくその小話にたくして、問いの答、つまり「意図をもたない自由な遊び」を鮮かに見せてくれたと言えましょうか。これにたいし、安野光雅氏は、思いを現すエピソ

ードをつなげる中に、流れに身をまかせるふうにしながら話します。スピーチに対するありようの違いを感じました。

この講演での、もうひとつの面白さは、何人かの演者が、自分の美しい子ども時代を語ったことでした。

ブラジルのアナ・マリーナ・マシャードさんは、子どもだったころ、信じられないくらいたくさんの昔話や妖精物語を知っていたおばあちゃんと過ごした夏を語っています。「毎日、日がくれると、お話の時間になりました。おばあちゃんが、ハンモックに座って、ゆっくり身体をゆすりながら、お話をしてくれました。お話の時間は夜だけのものと決められていたからです。昼ひなかにお話をすると、シッポがはえて来るというのです」と。マシャードさんの場合、この体験が長じてお話を作ること、更に「言葉が見える」ことの秘密につながるのです。この人の作品を是非読んでみたいと思いました。

子ども時代の話といえば、今回「なぜ読むか」の面から子どもたちの体験の発表があったことです。楽しみの読書へといざなったものはなんだったか、その軌道が率直に語られていて参考になるものです。

最後に、文学の仲間が敬愛のまなざしを注いだオーストリアのライトソンさんのアンデルセン賞受賞スピーチにふれておきましょう。彼女は、ご自分の幸せな作家生活を語りながら、今や文学の世界もまた経済価置のなかにまきこまれなんとしていること、しかし、「子どもの本に関心を持っている共同体」が生残っていく事で物語も残ることを述べ、感銘を与えるものでした。

（大妻女子大学）